

小学校 4 年小学校英語科

# 「友だちを助けよう 小さな医者さん」 (全 5 時間)

授業者 安彦 有里恵

## 実践のポイント

この実践は、北海道教育大学と共同で制作した研究開発学校オリジナルの教材を使用したものです。本単元は、外国語科の見方・考え方である「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えを形成し、再構築する」という点を重視して行いました。

そのため、単元全体を通して、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養うことができました。

## 授業のねらいと展開

この単元で育てたい資質・能力は以下の通りです。

- ・英語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ・積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ・英語の音声や基本的な表現を活用していく中で身に付けさせながら、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

この単元のねらいは、相手の体調を尋ねたり、自分の体調を伝えたりするために必要な語句・表現等を理解し、相手の体調に合わせた会話をすることができるようにすることとしました。これを達成できるよう、本単元では以下の学習活動を展開しました。

- 第1時 友達の具合が悪いときにどんな言い方をすればよいかを考え、単元の見通しをもち、単元計画をたてる。
- 第2～3時 ペア学習でやりとりの練習をする。グループ学習でカルタとりゲームやジェスチャーゲームを取り入れ学習をする。
- 第4時 友達の具合にあったお助けグッズを作る。
- 第5時 友達に具合をたずねて、答えてもらった具合にあわせて絵カードや物をわたす。(図1)



図1 コミュニケーションの目的等を整理し、適切な学習形態により学びを進める

視点 1 : 資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

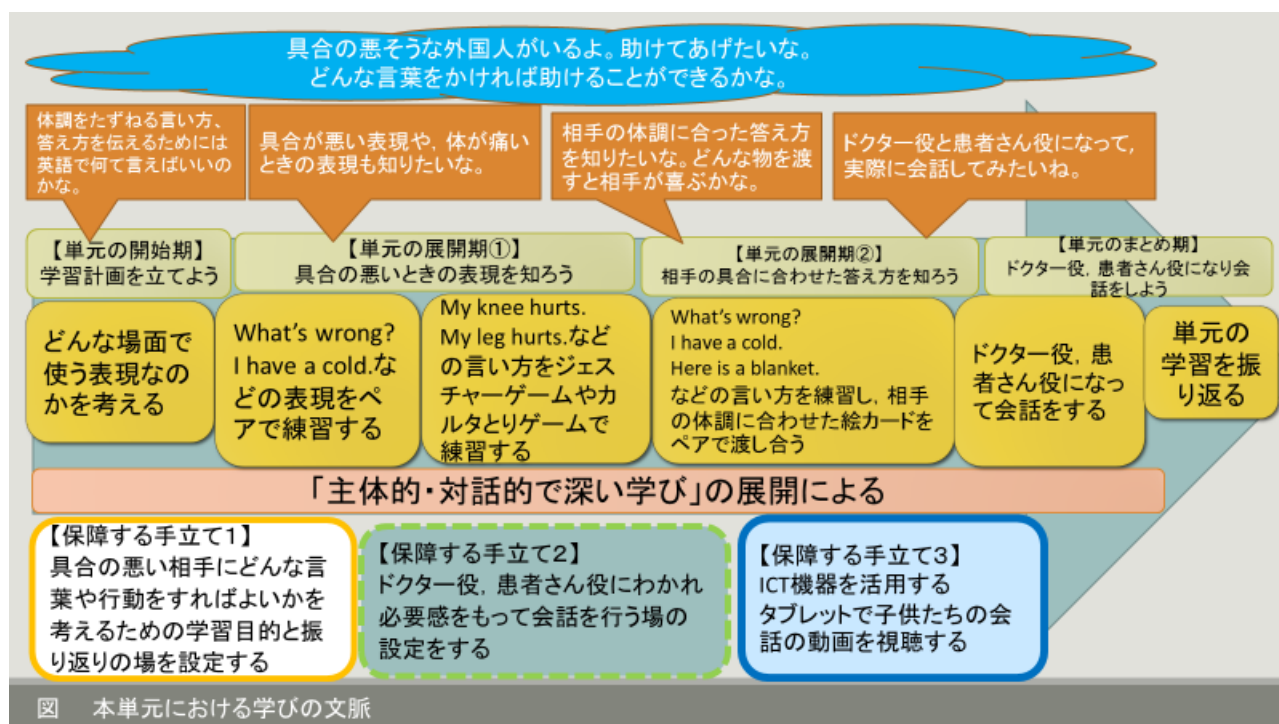


図 2 本単元における学びの文脈

資質・能力の育成を目指して「主体的・対話的で深い学び」を保障するためには、子供の思いや願いを見取ることがとても重要です。それは子供自身が学習することの見通しをもつことで、より主体的に学び続けることができるからです。そこで、単元の開始期には、単元の学びのゴールを示し、それに至るためにはどのように学習を進めたらよいかを子供と共に考え、設定することを特に大切にしました。

同時に、その学びの見通しが単元の目標に沿うものである必要があります。そのために、目標の達成に向けて、適切な学習活動を設定し、「学びの文脈」(図 2)を構想することが重要です。

本単元における具体的な「資質・能力」を身に付けた子供の姿は、

- ① 「What's wrong?」と友達の具合をたずねることができる。
- ② 自分の具合(「I have a fever.」や、「I have a cold.」等)を答えることができる。
- ③ 相手の体調に合わせて判断し(I have a fever.の場合は風邪薬や、アイスパック等)、答える。この姿が見られることで、この学びが深い学びとなっていると捉えます。

視点2 「主体的・対話的で深い学び」を保障する具体的手立てについて

【手立て1】 振り返りを活用することにより、主体的な学習を促す。

**研究内容②**  
**「主体的・対話的で深い学び」を保障する  
 具体的手立てについて**

**手立て1 振り返りを活用することにより、主体的な学習を促す**

前回の学習の振り返りを活用し、子供が成果や次のめあてを明確にできるようにする。さらに子供の必要感を見取り、弾力的に学習を展開できるようにする。

友達の体調の聞き方がわかったから、いろんな人と会話してみたい。→ペアやグループ、全体交流をしてみたいね。

熱があるという言い方は、I have a fever. とわかったよ。他の体調の言い方も知りたいな。→他の体の場所が痛いときになんていうのかな？

〇〇くんの言い方が本当に具合の悪そうな言い方でよかった。演技やジェスチャーを入れると伝わりやすいね。→次は〇〇くんみたいにジェスチャーを入れながら会話したいな。

JICAの先生にも体調を聞いてみたい。外国に行ったときにつかってみたいな。→ウェス先生に話ができるといいね。

図4 本單元における振り返りの活用例

主体的に学びを進めるためには、学習の振り返りを活用し、学習の成果と次のめあてを明確にすることが大切です(図4)。例えば、「友達の体調の聞き方がわかったから、いろんな人と会話してみたい。」という振り返りをした場合には、次時の学習を「ペアやグループ、全体交流をしよう。」という学習活動を設定します。また、「〇〇くんの言い方が本当に具合の悪そうな言い方でよかった。演技やジェスチャーを入れると相手に伝わりやすいね」という振り返りをした場合には、「次は、〇〇くんみたいにジェスチャーをしながら会話してみよう。」という学習活動を設定し、主体的で目標に向かった学習になるように工夫しました。(図5)

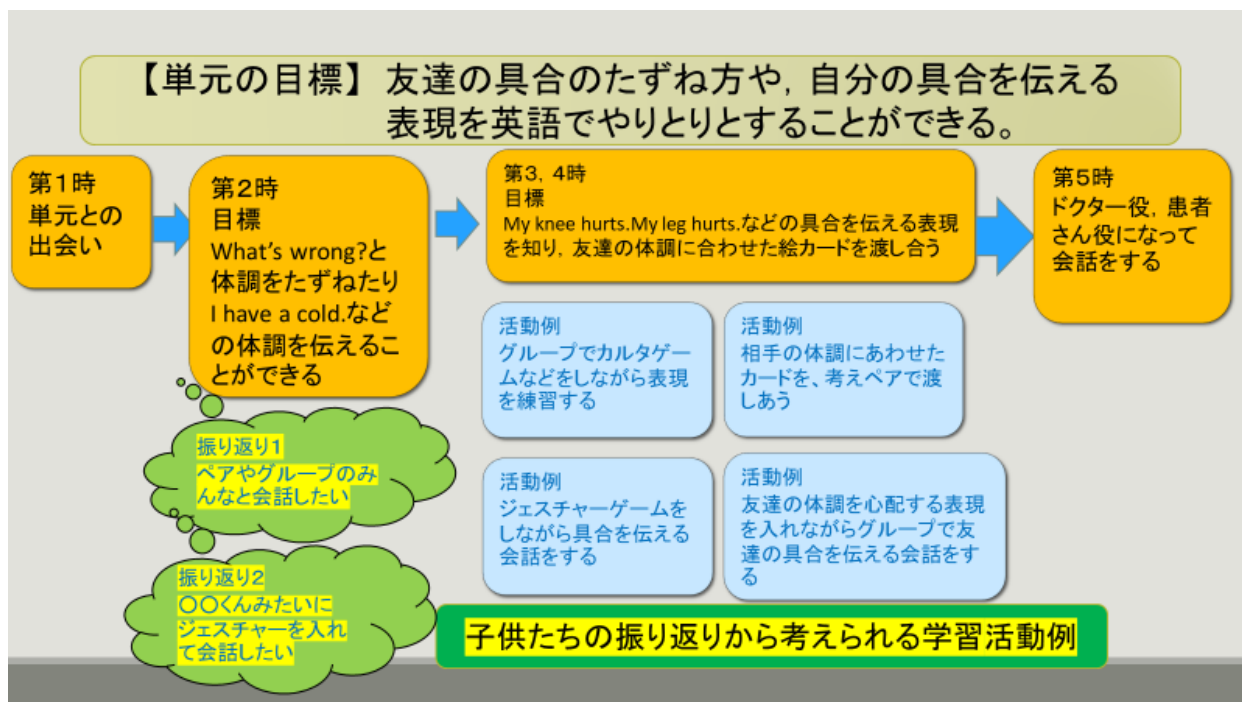


図5 振り返りを活用することで展開される学習活動例

単元のまとめ期では、「生かしたいこと」の観点で、「外国で習った表現を使いたい」という「学習した表現を自分の生活に生かしたい」という振り返りが出ていました（図6）。

このように、学びの文脈における目標を大きく変えずに、学習活動を弾力的に配置することで、主体的な学びが促されると言えます。

- ・次はみんなと一緒に英語で会話をしたい。
- ・隣の人だけでなく、いろいろな人と英語で会話したい。
- ・研究大会の授業で、相手を思いやる言葉をたくさんつかいたい。
- ・相手を思いやれるナイスドクターになりたい。
- ・友達が本当におなかや頭がいたくなったときに、Are you OK?と聞きたい。
- ・やさしくドクターが声をかけたら、かんじゃさんはちょっとでもげんきになれるかも。

図6 振り返りカードにかかれていた子供たちの言葉

【手立て2】 必要感のある対話的な学びを促す。

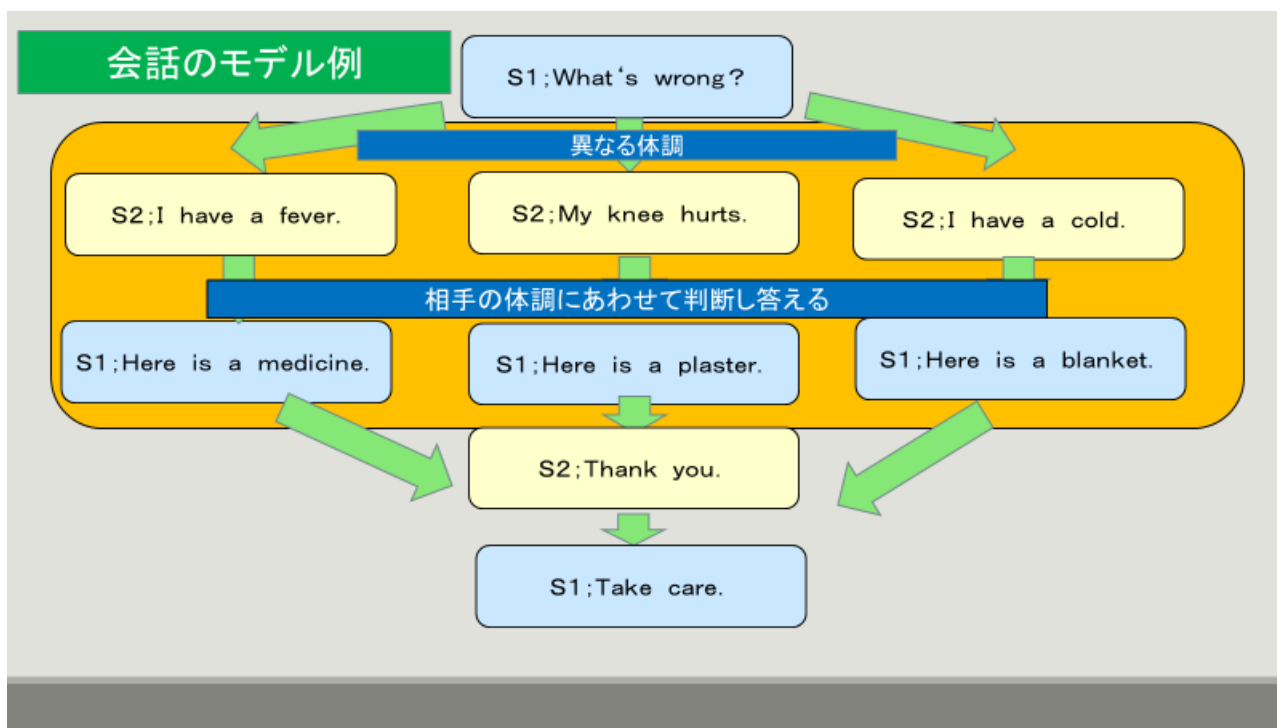


図7 役割を演じる活動を通して、対話的な活動を生む会話モデル例

本単元では、英語の言い方に慣れ親しむことができ、いろいろな友達の体調に気付くことができるよう、友達の具合をたずね、その具合にあった絵カードや物を渡すという活動をしました。さらに、英語表現を身につけるために、ペアで会話の練習をしたり、グループでのカルタとりゲーム、ジェスチャーゲーム等の活動をしたりして英語表現に慣れるように工夫しました。

ドクター役の子供たちは、お助けグッズを持ちながら患者さん役の子供たちに声をかけます。患者さん役の子供たちが答えてくれた具合にあったお助けグッズを渡すことができたなら(図7)、本時の目標が達成されたと判断し、結果として資質・能力が身につけていることとなります。

その中で、友達の具合に応じてふさわしい絵カードや物を選んで渡すことができるよう、友達の体



調をインタビューする場面を持ちました。その結果、子供たちの会話では、「具合にあったお助けグッズを渡したら友達が喜んでくれた。」という相手の反応を実感することができていました。

このように、より友達の具合にあう言葉やお助けグッズを考えることができるよう、必要感のある対話的な学びを繰り返しました。その結果、さらに友達の反応を感じる様子が見られ、相手の体調を気遣う表現を話したいという様子を感じることができました。その結果、「That's too bad. (かわいそうに)」や「Are you OK? (大丈夫?)」や「Take care (お大事に)」という表現を会話の中で言う様子が見られ、必要感のある対話を通して学ぶことができました。

【手立て 3】 Warm up や学習記録などで ICT を活用する。

ICTの目的, 内容, 効果		
ICTの目的	単元の目標を達成する	
活用の場面	Warm up	振り返り交流
活用の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チャンツ</li> <li>・歌</li> <li>・教材の動画</li> <li>・絵本など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の学習を振り返ることができる</li> <li>・友達の学習を振り返ることができる</li> <li>・よい会話のモデルを見ることができる</li> <li>・学級以外の子供たちとの交流</li> </ul>
期待する効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習への意欲を高める</li> <li>・英語の音を聞き取る練習</li> <li>・文字と音を結びつける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会話の大切なポイント (clear voice, eye contact など)を確認する</li> <li>・学習した表現の確認ができる</li> <li>・よい会話モデルを取り入れながら次の会話に生かす</li> </ul>

図 8 Warm up や学習記録で ICT を活用した例

本単元では、学習への意欲を高めたり、英語の文字と音を結びつけたりするため、Warm up でのチャンツで ICT を活用しました。さらに、よい会話のモデルを見ることができるよう、子供たちの会話を iPad で録画した動画を、授業の導入時に視聴しました。このような ICT の活用により、友達の会話を客観的に見ることができ、どんな視点で会話をすればよいか明確になりました。

さらに、動画を見ることで、コミュニケーション活動の大切な要素 (clear voice, eye contact など) を意識しながら会話をすることができていました。このように、会話のモデルとして、大切な要素を取り入れながら、自分の会話に生かしていけるように活用していく姿が見られました。

(成果) 子供たちが手立てを生かして主体的・対話的に学習をしていた。

本単元では目指す子供の姿を、相手の体調を尋ねたり、自分の体調を伝えたりするために必要な語句・表現等を理解し、相手の体調に合わせた会話をするようにすることとしました。そのため、相手の体調に合わせた言葉や、体調にあわせたお助けグッズを渡すことが大切です。そのため相手が何を伝えているのかを聞き取ろうとする気持ちをどのように見取るかが重要になります。

子供たちが主体的・対話的に学習を展開するために効果的だった手立ては、大きく分けて以下の3点であると考えます。

### (1) 会話のモデルを提示したこと

主体的な学習を進めるために、導入時に ICT を活用して、動画を視聴しました。このことにより、子供たちは会話の仕方を理解し、その後の学習活動に生かしていく子供たちが多くなりました。

さらに授業の中で、教師と ALT から子供たちのよい会話モデルを紹介する場面をもちました。会話の大切な要素（clear voice, eye contact 等）を取り入れながら会話をしている子供を全体交流の場面で取り上げ、学級全体で共有することができました。

このように、よい会話のモデルを何度も見て学習を積み重ねていくことで、会話の大切な視点を明確にし、より主体的に学習できることがわかりました。

### (2) ドクター役、患者さん役の役割と、会話場면을明確にしたこと

ドクター役、患者さん役という役割を明確にすることにより、コミュニケーションを行う目的や場面をはっきりさせ、相手の体調に応じて自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができていました。

さらに、相手の体調にあった物を渡したり、相手を思いやる言葉をかけたりすることができているドクターを、ナイスドクターとしました。そこで、単元のゴールとして「ナイスドクターになって、友達を助けよう」という場面設定をしました。この学習の中で、子供たちの会話の最後に「Take care. (お大事に)」「That's too bad. (それはかわいそうに)」と相手の体調を気づかうような言葉をかけている子供たちも多く、友達の体調を考えた言葉をかけることができていた様子も見ることができました。

### (3) 子供たちのよい会話を認め合う場面を設定したこと

授業の振り返りの場面で、友達の学習の様子を紹介する場面をもちました。本時で目指す姿を教師と子供で共有していることにより、目標にある「知識・技能」や、「思考力・判断力・表現力」の力がついている子供の様子を、子供たち同士の中で感じ取り、伝え合うことができていました。

子供が認められる場面を設定することで、子供同士が互いに資質・能力を高め合う、学級の雰囲気が出ていました。

(課題) 交流中の一人一人の子供の見取りが難しい。

本実践の場合、既習の語句・表現・文の形を活用して子供が自由に個人の思いを表し交流することができるという効果的な面があげられます。しかし、自由な子どもたちの会話の場面で、教師が一人一人の子供の見取りをすることが難しくなってしまうという点が課題となりました。

教師側が子どもたちの見取りをするためには、お医者さん役の座席を固定し、患者さんがお医者さんを選びながら交流をする方法が考えられます。そうすることで、患者さん役の子供たちも意図的にドクターを選んで会話することができると思います。お医者さん役の子供たちは、患者さんのため既習の語句・表現・文の形を活用し、会話をするのではないかと考えました。

この度の実践で得られた課題については、今後の授業実践の中で改善を図っていく所存です。

○ 事後研でいただいたご指導・ご助言等

本実践における授業公開後の事後研において、たくさんのご指導・ご助言をいただくことができました。改めて厚くお礼申し上げます。

(1)「主体的・対話的で深い学び」を保証する3つの手立てについての内容

- 学習のスタート時に、JICA 研修の最中であったこともあり、単元のゴールを、もし JICA の先生が倒れたらどうするかをスタートとした。目標を具体的に示して、コミュニケーションの目的・場面・状況を子供たちと共有していたので、「主体的・対話的な深い学び」につながっていたと考える。  
単元のゴールに関して、旭川小ではゴールとして単元の最初にコミュニケーションの様子を見せている。そうするとどう学習を進めていくとよいか見通しをもてる。【手立て1】
- 授業の初めに ICT を使い、子供たちの会話を動画視聴することが効果的であった。効果的な支援であり、よい会話モデルがあって、よい活動が生まれたと考える。【手立て3】

(2) 本単元における「資質・能力」を身に付けた子供の姿についての内容

- 本単元ですでてくる語句・表現は What's wrong?・I have a ~.が教科書に載っているやり取りであるが、絆創膏などの薬の単語は4年生にとっては難しいと感じた。そのため、教科書を使って繰り返し聞かせながら練習をし、さらに興味をもって取り組めるよう、聖徳太子ゲーム、ジェスチャーゲーム、カルタを取り入れた。しかし、表現・語句がわからなくなった場合はジェスチャーで伝えるのもありということにした。また、物を渡す表現として、単語が言えなくても、Here you are.といって渡すことを教えていた。
- 5・6年生がやるような内容を4年生が資質・能力を身に付け学習していて素晴らしかった。もっとすばらしくするために、会話の中で、ドクターのセンテンスが多くなりがちなので、Dr ; Here is medicine.に対して Patient ; Oh, medicine.と反復するなどの会話の工夫もありだろう。
- 単語の発音の最終確認のときに、ジェスチャーも付けさせていたのが良かった。思いやりをもってグッズを渡すことにつながっていると思う。中学校の英語に結びついているのがよい。
- 本時に至るまでの流れが教室内の掲示物でよくわかる。子供たちはよく英語に慣れ親しんでおり、Nice doctor. Nice patient. Take care.など自然に出てくるやり取りから子供たちの成長が感じられる。
- 言葉は伝達手段の一つであるが、ジェスチャーの方がものを言うことも多い。Good job. Feel better soon.などのとき、ジェスチャーが伴うとよいだろう。ジェスチャーの意味合いにもう少し重きをおいてもよいだろう。